

坪内逍遙とH・Mポズネット・Ⅱ

——歴史的方法をめぐる——

井 上 英 明

本稿は数年前に発表した小論、「坪内逍遙とH・M・ポズネット——比較文学講義をめぐる——」(注1)の続稿として書かれるものであるが、わたくしはさきの小論でポズネットの生誕・家系・学歴・ニュージランド行き・ニュージランドのオークランド大学教授時代の動向・さらに同大学辞任と帰国をめぐる問題についての調査の一部を報告するとともに、逍遙の東京専門学校における「比照文学講義ノート」(注2)とその原拠となったポズネットの著作“Comparative Literature”のかかわりあいを検討するうえで、さしあたって解決されなくてはならない問題をつぎの四項目にまとめて提出しておいた。

- (1) 逍遙はポズネットのどの部分に不満をもったか。
- (2) ポズネットをいかなる本質的理由によって推奨したか。
- (3) ポズネットのどの部分を取り、どの部分を捨てたか。
- (4) 逍遙自身の意志によって挿入付加されたのはどの部分か。

前稿ではこの四項目を逆順に検討し、(3)と(4)については不練未熟のものとはいえ、いちおうの解答は呈示しえたと思う。

そこで本稿は(2)に移るが、この(2)はポズネットと逍遙をめぐるものとも中心的な問題であることから、前稿ではこの(2)の問題について、

「一九世紀中葉のイギリスの思想界と明治中期の日本の外国思想輸入の実情とを背景にポズネットの前二著、特に『歴史的方法——倫理学・法律学・法律経済学における——』(注3)と逍遙の『小説神髓』

をかえりみて、両者の内容の延長上にポズネットの『比較文学』と逍遙の『比照文学講義録』とを切り結んで検討しなければ解答は出て来ない云々」と書いた。ポズネットが“Comparative Literature”を上

梓し(二八八六)、二年後に逍遙がこれを読み、「比照文学」と題して

学生に講義したとき(注4)、すでに前者には『歴史的方法』(二八八

二)と題するさきの著述があり、後者には周知のごとく『小説神髓』

(二八八五)がある。逍遙がポズネットに近づき、共鳴し、これを紹

介したのはどのような本質的理由によるものであったのか。「氏ノ論スル所……立論正密ニシテ引証周到ナリ。我々文学ニ志ス者ノ参考ト

ナルヘキモノ一ニシテ足ラス」(注5)と講義の冒頭に述べた逍遙におけるボズネット評価の真意はどこにあったのか。この点を可能なかぎり詳細に考えてみるのが本稿の主な目的である。

I

ボズネットの“Comparative Literature”の中で、逍遙がとくに大きくとりあげて強調したのはつぎの七つの問題である。

- (1) 文学トハ何ソヤ
- (2) 文学ノ相関的ナル所以
- (3) 文学発達ノ原理
- (4) 比照法と文学
- (5) 国文トハ何ソヤ
- (6) 国文ニオケル人間
- (7) 国文ニオケル天然

(1) 「文学トハ何ソヤ」はボズネットの原著では“Book I. Chapter I. WHAT IS LITERATURE?”の部分であるが、逍遙が積極的にとりあげたのは、「文学トハ何ソヤ」に対する定義ではなく、むしろこれを定義することの困難と、その困難の由来とであった。「文学ノ本義ヲ隠蔽セル四条ノ原因」(九ウ)として逍遙は、「文ト云フ語ノ語源ノ曖昧ナルヲ」、「学者及ヒ不学者カ文学ノ変遷ヲ察スル能ハス、文学

ノ歴史的タルヲ察スル能ハス、文学ヲ以テ右今一轍ノモノト思ヒ、或一種ノ文学ヲ以テ万古不易ト仮定セシヲ」、「文学ヲ著作スルノ方法世態ヲ異ニスレハ異ナルカ故ニ、文学ノ性質曖昧ナリシヲ」、「文学ノ理想及ヒ目的ハ世態ヲ異ニスレハ異ナルカ故ニ、文学ノ本質ノ曖昧ナリシヲ」(九ウ)の四つの理由をあげている。つまり、文学の本質が曖昧でその定義が困難なのは、文学という語の語源や文学の方法・目的・理想などがそれらを生み出した時代と場所の変遷と相違に強く制約されているからで、そうした事実への明確な認識が逍遙の比較文学講義のそもその出発点であったわけである。したがってボズネットの「文学トハ何ソヤ」の前提には、「絶対円満ナル文学ノ定義ハ今之ヲ望ムヲ得ス」(十ウ)という、文学の定義の放棄があるが、じつはこうした、「絶対円満ナル文学ノ定義」を拒否することから、ボズネットの『比較文学』の方法論は逆に導き出されているのである。

文学ノ本義ハ前ニ云ヘル如ク不完全ナリ。(中略)去リ乍ラ、古今東西ノ文学ヲ比較シ、丁寧ニ異同ヲ探究セハ、多少ノ恒久ナル中^{トラシク}央事実、即チ諸文学ノ基礎トナルヘキ重要ナル事実ヲ知ルヲ得ヘシ。若シ、此ノ若キ事実ニシテ之ヲ詳ニ知ルヲ得ハ、夫ノ文学ヲ^{期定スル}ノ原則モ之ヲ定ムルニ難カラザルベシ。去レハ、是等原則ヲ若シ^{整齊}シ一束スルヲ得ハ、之ヲ一科学ト名ツクトモ敢テ大ナル^{僻事}ニアラス(十一ウ)

すなわち、ポズネットの比較文学は文学研究を他の学問と同じように科学の域に高めようとする、当時における文芸科学の樹立であったといつてよい。そして「恒久ナル中央事実」とは「諸文学ノ基礎トナルベキ重要ナル事実」であり、この「事実」についてのポズネットの考えを逍遙はつぎのように要約する。

論シテ茲ニ至リ、氏(注・ポズネット)ハ二条件ヲ設ケテ曰ク、文学ハ左ノ二勢力ノ下ニ動ク。曰ク静勢、曰ク動勢。前者ハ氣候、地味、動物等ヲ意味シ、後者ハ共同的生活ヨリ一個的生活ヘノ進化ヲ意味スト。案スルニ、氏ノ意ハ是等勢力ノ性質ヲ弁明シ、其ノ文学ニ於ケル關係ヲ期定シ、文学ノ社会的条件ニ依頼セルヲ明ラメ、随テ文学ノ相関的ナルヲ弁シ、其ノ有限ノ是非ナキヲ弁シ、或比較的、即チ相関的ノ意味ニ於テ文学ヲ科学トナサムトスルナリ(十一オーウ)

この一節の筆録者、紀淑雄によると、「静勢」と「動静」を逍遙はそれぞれ *statical agent*, *dynamical agent* と英語で説明したらしく、そのように傍書されているが(注6)、この二つの術語はポズネットの比較文学の理論的核心をなすものと思われるので、ここでいちおう逍遙の要約とは別に原文の正確なコンテキストをたどってみる必要がある。「静勢」と「動静」という術語は文学研究に「科学」という用語を使用することの根拠を説明するものにほかならない。ポズネット

によれば「科学」という用語を使用することによってわれわれは自然科学のような普遍的真理という一個の実体——このばあいでは、文学の進化はすべてそうした文学の「科学」そのものにとつて決定的であるということ——を説明することはとうていできはしないことを明確にしておくかなくてはならない。ただ、「科学」という用語を使うことによって、われわれが多種多様な文学の局面に見出せるのは「限られた真理」であつて、それがあくまでも「限られた真理」として理解されるためには、「多少ノ恒久ナル中央事実」を中心に系統立てて分類されなくてはならない。そのような「中央事実」がじつは「氣候」・「地味」・「動物」・「植物」であり、かつ、「共同的生活ヨリ一個的生活ヘノ進化」なのである。そして、ポズネットは前者の外的条件を「静勢」*the statical influence* といひ、後者の進化論的条件を「文学の興亡の動的原理」*the dynamical principle of literature's progress and decay* といつて、逍遙はこれを前者の呼称に对照させて「動勢」といつているのである。したがつてこの「文学の興亡の動的原理」を説明するに先だつて、社会的条件への文学の依存度、その結果として生じる文学の相関性、または必然的に伴なうその限界性などが説明されなければならないわけである(注7)。そこで(2)の「文学ノ相関的ナル所以」ではなにゆえに文学がこの「静勢」と「動静」に制約され、あるいはこれらと相互依存関係にあるかが説かれるわけである。すなわち、

凡ソ文学ハ精粗ヲ問ハス、男女ノ感想ヲ發表スルモノナリ。感想トハ或男女の天然物ニ於ケル、動物ニ於ケル、社会ニ於ケル、又ハ一個人ニ於ケル感想ナリ(十二ウ)

と、一般的な規定を行ない、さらにこのように多様な「感想」の主体的創出者であるところの「男女」からなる人間の考察に移って行く。

元來人間ハ非常ニ復雜ナル性質ノ分子ナリ。然ルニ、若シ是ヲ純然孤立セル一分子ノ如ク思ヒ、偕テ研究ヲ試ントセハ……得ル所ノ智識ハ支離滅裂セル孤立的分子ノ塊ニ闕スル一種ノ漠然タル智識ニ止マリ、何等ノ思想モ其内ニハ含マレサルヘシ。去レハ、真ニ人間ヲ了解シ且歴史ヲ了解セムトナラハ、件ノ微分子ヲ連結シ、相比較シ、並ニ他ノ動植物及ヒ天然物等トヲ連結シ、且ツ比照スル所ナカルヘカラス。案スルニ、人間の形態ハ他ノ動物及ヒ天然物ノ同シク植物的鉅物的ノ原素ニ解剖セラルヘキ組成成分ヨリ成レリ。随テ其肉體ノ感情ノ如キハ他ノ動物ノ感覺ト比シテ大差アルヘシトモ思ハレサルナリ。(十三オーウ)

この一節における人間観は徹頭徹尾、十九世紀中葉のイギリスを風靡した新興思想の支配下にある。すなわち、ダーウィン(一八〇九—一八八二)の生物学と、ハーバート・スペンサー(一八二〇—一九〇三)の社会学である。神から独立した生物学における人間はそれじしん

他の生物とともに相対化され、人間はアダムとイヴの子孫ではなくサルの子孫であることから、極端にいえばサルの文学から人間の文学までの進化過程が説明されなければならない。しかし、さしあたって文学は「男女の感想」の発現という規定から出発するので、さきの「静勢」と「動静」といった外部条件の人間における影響を知るには古今東西の文学に現われる「女性ノ人物ニ留意スヘシ」(十四オ)と云うことになる。この方法は二つある。一つは「支那、印度、日本等ノ文学ニ就テ其内ニ見タル女性人物ヲ取り、之ヲ希臘ノ院本ニ見タル若シクハ近代ノ欧文ニ見タル女性的人物ト比較」し、「其性質ト云ヒ其境遇ト云ヒ、其男性ニ於ケル及ヒ社会ニ於ケル関係、大ニ相異ナル所」(十四ウ)があることを認識することで、現在の対比研究に近いものである。もう一つは、「同シ国ニ就テ見ルモ、少シク時代ヲ異ニスレハ忽チ大ナル相異アルヲ見ルナリ」(十四ウ)という認識で、これは文学の歴史的研究といつてよい。ボズネットはこの対比研究によつて具体化される文学の相関性の例証として、演劇における三一法則の消滅は批評家の恣意に出るものではなく、演劇それじたいが「社会及ヒ一個人ノ進化ト其ノ周囲ノ自然トノ関係」(二十一オ)に基づいて変化したためであることを証明する。つぎに翻訳の問題に移り「外国文の翻譯シ難キハ蓋シ其ノ国語及ヒ人情等ノ相異ナレルニ基クニテ、是亦文学ノ相關的ニシテ他物ニ制限セラルヽニ依ルコナリ」とする。この翻訳の問題は今日の比較文学研究の一部門であるが、一つの文学作品がいくつかの他国語に訳され、それぞれの国で別様の運命を

たどって変化していくのも、文学の相関性のしからしめるところと考
えているのである。さらにポズネットは文学と自然の相関性をとりあ
げ、山・水・草・木・星・月・太陽などが、人間の観察によってどの
ように相違するかを論じ、しかして逍遙は右のような論旨を紹介しつ
つ、ポズネットの結論をつぎのように要約するのである。

文学ハ常ニ純然タル独立ヲ得ス。外部ノ勢力ニ支配セララル、モノ
ナリ。換言スレハ、社会ト文学トハ互ニ相関シテ、離レサルモノナ
リ。(二十七ツ)

今日からみればきわめて平凡な思想かもしれないが、逍遙がこう言
ったときの日本の文壇は、生物界における人間の相対化、人間と自然
とを含む世界過程における文学の相関性など、思いもつかなかつたの
である。逍遙はつぎに(3)「文学発達ノ原理」(Posnett, Chap. III. THE
PRINCIPLE OF LITERARY GROWTH)をとりあげるが、(3)で
の大きな特色は、文学それじたいの内的な発達、あるいは文学精神そ
のものの自己運動といったヘーゲル的な歴史観ではなく、すでに世界
において独立の根拠を失なつた文学に対する社会の影響の原理であ
る。ポズネットの論義は逍遙によってつぎのように要約される。

文学ノ原理トハ即チ一個性ノ年二月ニ深く成行キ、且ツ年二月ニ
広く成行クヲ説明スルニ在リ。(英文引用省略)併シ乍ラ、此ノ比

例ハ時ト場所トヲ異ニシテ実ニ驚クヘク事ナリシナリ。今ヤ、其ノ
相違ノ度ヲ説明センカ為ニ、遠ク古代ニ遡リ、村落時代、市府時代
若シクハ専制時代等ニ就テ一個人ト全社会トノ関係トヲ見、並ニ各
時代ノ文学ヲ精査シ、其ノ孰ノ場合ニ於テモ前ニ挙ゲタル原理ノ陰
然トシテ存在セルヲ見ルベシ。要スルニ、一個人ノ expansion (邦訳
語省略)と、specialization (邦訳語省略)トハ漸々ノ発達ヲ経テ来レ
ルモノナリ。(三十一ウー三十二オ)

この一節は、文学史の方法というより、歴史学の方法である。文学
に現われた社会制度の歴史とでもいえそうである。しかし文学を社会
から独立させては、文学研究は科学にならない。文学は相関的・相対
的なものである。社会環境の変遷によって変化し分化するものであ
る。ポズネットにおいてはこの事情をより正確に解説するために、つ
ぎの(4)「比照法と文学」(Posnett, Chap. IV. COMPARATIVE ME-
THOD AND LITERATURE)の一章を設ける必要があつた。そし
て、この(4)冒頭に「比較法」の本質と歴史を論述しているのである。
ところが、逍遙はその部分(原書の分章番号では21にあたる)を省略
して、文学と科学の相違を説くことからはじめ、文学の変遷の内的原
因として、部族社会から封建社会、市府社会、中央集権社会、立憲政
体社会と日本の歴史にあわせた社会体制の変化をあげる。つぎに外部
原因として、外国文学の影響、外国文学の模倣の問題を指摘し、さい
ごにふたたびさきの「静勢」と「動勢」の条件下にある文学の変遷が

比照文学の研究法においてもっとも大切な綱目だと強調して、この章を終っている。逍遙はここで「動勢」を「一族ヨリ一都会、一都会ヨリ一国民、都会及び国民ヨリ四海兄弟ニ至ル変遷」と具体的に説明して、ポズネットの原著の第二篇、氏族文学、第三篇、都市国家文学、第三篇、世界文学という進化過程に一步近づいているが逍遙はこれらの諸篇を講義から除外している。ただ、第二篇、第三章の「個人的氏族の詩歌」の中から「詩ノ変遷ニ関スル^マぶくとるゆゑノ説」(三十六ウ)をとりあげたにすぎない。

ところで、逍遙の関心はなぜ社会的条件、「静勢」・「動静」と文学との関連に集中しているのか。さきにあげた(5)「国文トハ何ソヤ」、(6)「国文ニオケル人間」、(7)「国文ニオケル天然」もすべて、この関連から説かれているから、逍遙の主な関心はやはり、文学研究の「歴史的方法」にあったといつてよい。これには明治十年から二十年代にかけて、スペンサーの社会学の流行という事情があるろう。しかし、わたくしはすでに『小説神髓』を上梓していた逍遙が、この本の内容をより豊かにし、さらに発展させ、しかも一段と科学的に組織させる方法論をポズネットの『比較文学』の中に発見していたのではないかと思う。「夫れ小説は美術にして詩歌の変態に外ならざる也」という定義も、ポズネットの進化論的な思想によつてはじめてより大きな意味をもって来たものではあるまいか。

逍遙がポズネットの『比較文学』に興味をもつた理由と、ポズネットじしんにおけるそのような思想の胎生のいきさつを乏しい資料から

つぎに少しばかり考察してみることにする。

II

ポズネットの「静勢」と「動勢」に制約された文学の変遷にたいする認識、とくに生物学的有機体のアナロジーとしての社会的有機体における進化論的な文学観は、すでに『小説神髓』の中に発見することができる。逍遙は人情の単純な状態から複雑な状態への変化と文芸形式の分化、あるいは進化、あるいは進歩といった歴史的方法の意識をもって『小説神髓』を書いているといえる。「総じて文化発達して人智幾階か進むにいたれば、人情もまた変遷していくらか複雑とならざるべからず。いにしへの人は質朴にて、其情合も単純なるから、僅かに三十一文字もて其胸懐を吐きたりしかど、けふ此頃の人情をばわづかに数十の言語をもて述べ尽すべうもあらざるなり。よしや感情のみは数十字もていひ尽すことを得たればとて、他の情態を写し得ざれば、いはゆる完全の詩歌にあらねば、彼の泰西の詩歌と共に美術壇上に立ち難かるべし」(注8)というのが、『新体詩抄』や『孝女白菊』などの長詩出現の意味であった。またジャンルの分化にたずる意識も、「正史の本源は神代史なり。奇異譚^{ロマンス}の濫觴^{はじまり}も神代史にあり。史と小説とは其源おなじ。只累世の変遷にて今日の差を生ぜしのみ」といい、さらに人間の知性の進歩についても、「文運ますます進歩して開明の世となるに及べば、フヘイブルも亦た変遷して多少の進歩なき能はず。蓋し文運の進むにしたがひ、世の流行もむかしに似ず、とかく奢侈に

傾きつゝ、万づの事みな贅沢なり。且つは人智の進めるまゝ、あまりに甲斐なく浅はかなる彼の寓言の書などをめで喜びては読まざるべし」と説いて、きわめてスペンサーの考えに近い。したがって、逍遙の文学観には、鬼神誌——^{ミソゴシ} 奇異譚——^{ロマンズ} 寓言——^{フレイブル} 寓意小説——^{ノイベル} 小説神史という史的展望があつて、これが人間の知性の進歩・複雑化、社会形態（世態）の分化・発展に依存していることがすでに理解されていたわけである。したがって、ポズネットの『比較文学』に出遭う前に、逍遙はかれの理論を容易に咀嚼するだけの知識を身につけ、むしろその実践に踏み切っていたといつてよい。

ところで、ポズネットはこうした社会学的な文学研究における文学の相対性やその歴史的方法を『比較文学』という著述においてはじめて開陳したのではなかった。ここでぜひともとりあげなければならぬのが、ポズネットの処女作で、『歴史的方法——倫理学・法学・法律経済学における——』という書名をもつ、一見文学研究とは縁のなさそうな八十頁からなる小冊子である。一八八二年（明治十五）、ポズネット、二十七歳の時、ロンドンのロングマンズ社から出版され、現在日本の図書館ではほとんど見ることができないものである。この本はその表題から受ける印象とはうらはらに、きわめて思弁的な叙述に圧倒され、若きポズネットが確固とした学問の出発点にあたって科学的方法論を求めて苦悩する厳しい思索の跡が読みとれるようである。

——われわれはいまもなお真理を探究している。いかなる真理であるか？「物質的な力」との因果関係でつながれた「絶対的真理」なるものは存在しないし、「永劫の精神」との因果関係でつながれた「絶対的精神」なるものも存在しない。そこでわれわれの真理、いやむしろ、われわれが手にすることのできる真理とはいかなるものであるか。……社会的・個人的関係の真理、すなわち、「相対的真理」である。……それゆえに、われわれがわれわれの科学を建設するのは「人間の集まり human association」からであつて、他のなにものからでもない。（注9）

ポズネットはこうした「相対的真理」を認識する方法、つまり文学をふくめるあらゆる人間の経験を一つの社会学的な理論に体系化するために四つの方法を考え出す。

- (1) 比較法 The comparative method.
- (2) 生存の方法 The method of survival.
- (3) 科学的想像力の方法 The method of scientific imagination.
- (4) 具体的分析の方法 The method of concrete analysis.

ポズネットはこの四つの方法を「一般的方法」The general methodとして、過去・現在・未来の現象にかかわる「歴史的方法」The historical methodに関連づけている。（注10）したがってポズネットの

「歴史的方法」はこの四つ方法から成立しているものであって、それらはあたかも生物学の系統分類におけるごとく、「種」 species として配列されているのである。しかし、ポズネットはこの「歴史的方法」が共同体的、ないしは集団や集団の集まりに適用されるべきものであると確信しているもの、それはけっして唯物論的ではなく、あくまでも思想・言論・行動の広大な発展の上にさし向けられて、それらを確認づけるものであるとしている。マルクスが『資本論』第一巻を出版したのは、一八六八年であるから、ポズネットは当然史的唯物論を知っていたはずであるが、かれはやはり、イギリス社会学思想の枠内にあったといつてよい。その点に関して、社会科学と歴史的方法が描きうるのは相対的真理以外のなにもでもないという原則を守り、かりにある社会体制がある偶然的「実体」によって変化させられるという事実が発見できても、その社会体制の分析を離れて、そうした「実体」を容認する能力をかれはきっぱりと放棄し、「われわれの科学とその方法の領域と範囲を厳密に限定」(注11) しているのである。

そして第二章からまず「倫理学」の検討に移り、「倫理学の体系の実際の価値は社会的生活とその関係に依存する」(注13) と明言し、その論旨の展開の方法は、四年後の『比較文学』の方法のプロレゴメナの感がある。

坪内逍遙が伝えたポズネットの『比較文学』は、以上述べて来たように、じつをいえばかれの「歴史的方法」とよばれるものの中での一方法たる「比較法」であったことがここにおいて理解されるのである。

そしてこの「比較法」なるものをきわめて歴史的に説いたのがポズネットの第三番目の著書、『比較文学』における「比照法ト文学」の冒頭の部分であり(注14)、これを逍遙は省略しているのである。ポズネットによれば、“Comparative method”なるものは、思想そのものと同じく古いに古く、論理学における無味乾燥な否定や肯定命題もある意味では「比較法」によって決定されることから、それは西洋思想の根底に流れて来たものである。ただし、ギリシア人に「比較哲学」 comparative philosophy が芽生えなかったのは、かれらが四囲の民族の言語を軽蔑し、過去への省察が欠如していたからである。ヨーロッパ人に比較法の意識が出現するのはダンテ以降であり、とくにルネッサンスは近代ヨーロッパ人の精神に比較省察 comparative reflection の基礎をすえた。つづいて近代国家の成立により、国粹主義者によって近代的制度、思想・感情の比較が行なわれ、新世界の発見はヨーロッパ文明を原始文明に接触させ、その対照からくるかれらの驚異は、サラセンやビサンチン以上のものがあつた。通商の興隆は列国間に競争意識をもたらし、かれらの比較意識をつのらせた。個人意識の覚醒は神学の教条と対立し、宗教改革となるが、これも比較意識の結果である。キリスト教宣教師は東洋の文学をもたらし、ヨーロッパ人に新鮮な感動をよびおこし、ヨーロッパの東洋市場獲得・植民地政策はその地の言語研究をもたらした。インド・ヨーロッパ語族における比較言語学の成立である。また、交通機関やマス・コミの発達が全世界をたがいに比較する習慣をつのらせていった。しかし、こうし

た「比較法」が意識的に隆盛をきわめて来たのは十九世紀である。その理由はおもに機械の発達である。「比較法」はいわばヨーロッパの歴史の中から生まれ来たものである。したがってヨーロッパ人の感情の表出たる文学は当然この「比較」という意識と密接にかかわりあっているのである。

十九世紀中葉以降、ヴィクトリア王朝のイギリスはかつての「パックス・ローマナ」ならぬ「パックス・ブリタニカ」の極盛期であった。ポズネットもあらゆる意味でヴィクトリア朝の学者であり、その時代精神はひとえに「進歩の思想」であり(注15)、ことにダーウィン以後の代表的思想家・歴史家としてこの進歩の思想を楽天的に展開するのは、スペンサー、バックル、レッキー等であり、ポズネットもその過巻の中にいたといえる。ポズネットの『比較文学』は「文学の社会学」とでもいわれるべきもので、その研究叙述は一見すると「比較法」と「歴史的方法」とによって行なわれているかのごとき印象を与えるが、かれの処女作では、すでに述べたように、「比較法」は「歴史的方法」の中の一方法であり、これには、空間的比較と時間的比較とがあり、いずれも「静勢」と「動勢」との関連における文学現象間における連絡の組織的観察といつてよい。これまでフランスの比較文学の立場からポズネットはどちらかといえば冷遇されて来た。そしてそれはアメリカにおける「一般文学」や「対比研究」の元祖のごとくみられ、この方法による研究成果がともすれば軽視される傾向にあったといえる。しかし、そうした非難はそれぞれの方法論の出現の背景

を考慮に入れない軽率な印象から出たものではあるまいか。ポズネットの「比較文学」は一種の「社会学」であり、過去の文学現象の因果づけと、未来への展望をもった社会学的世界文学史といつてよさそうである。とくに文学とそのジャンルの進化的な考え方は二十世紀になっても世界の文学史家を支配し続けた。ことにスペンサーの暗示した文学の発展が単純なものから複雑なものへ進化するという法則によって理解される(注16)という考えは、J・A・シモンズのエリザベス朝ドラマの研究(一八八四)や、モルトンの『劇作家としてのシエークスピア』(一八八五)や『文学の近代的研究』(二九一五)、F・ギュメールの『詩の起源』(二九〇二)、A・S・マッケンジーの『文学の発達』(二九一二)などの著作を支配している(注17)。ヨーロッパ大陸において「進化論」の影響をうけた代表的な文学史家として、フランスのテーヌ、ブルンチェール、ロシアのヴェセロフスキーなどがいるが、ここでは立ち入る必要はないだろう。ただ、ポズネットも十九世紀中葉のこうした思想界の中におきなおして、再評価し、その功罪を決定しなければならぬであろう。むろん、当時においてすでに逍遙はポズネットの理論に不満をもらしている。そのことはまた別の機会に述べてみたい。ただ、筆をおくにあたって、ふと脳裡をかすめるのは、数年後に鷗外との間にたたかわれた「没理想」をめぐる論戦に、逍遙がこの徹底的に「没理想」に貫かれたポズネットの『比較文学』をどの程度に参考にしえたであろうかということである。森鷗外の依拠したハルトマンの『無意識の哲学』は一八六九年に

出て、スペンサー流の楽天主義的な進歩の理論に対立するかのよう
悲観主義的な形而上学と宇宙の運命に関する奇怪な理論を展開して
るからである。(未完) (一九七二・九・二八)

注

- (1) 「比較文学年誌」(早稲田大学比較研究室・第五号・一九六九・三)
- (2) 「A資料」坪内文学士講義・比照文学 Comparative Literature」(「比較文学年誌」第二号・一九六五・十一)
- (3) 注(1)の一〇六頁で本書の名は『倫理学における歴史的方法——法律学と法律経済学』となっているが、これは『歴史的方法——倫理学・法律学・法律経済学における』が正し。(1)で訂正しておく。
- (4) 富田仁氏『明治中期の比較文学論』(「比較文学年誌」第三号)
- (5) 注(2)の「緒言」
- (6) 「静勢」は Statistical と誤記されている。
- (7) Posnett, Comparative Literature, p. 20.
- (8) 『小説神髓』上巻・「小説総論」(坪内逍遙・二葉亭四迷集・現代日本文学全集I・筑摩書房)以下同じ。
- (9) Posnett, The Historical Method in Ethics, Jurisprudence and Political Economy. Longmans & co. London, pp. 3-4.
- (10) Posnett, *ibid.*, pp. 10-12.
- (11) Posnett, *ibid.*, p. 22.
- (12) Posnett, *ibid.*, p. 22.
- (13) Posnett, *ibid.*, p. 23.
- (14) Posnett, Comparative Literature, pp. 73-76.
- (15) John Bowle, Politics and Opinion in the 19th century, chap. II, pp. 223-247.
- (16) H. Spencer, Progress its Law and Cause 1857. 清水礼子訳「進歩に
つづいてその法則と原因」(世界の名著『コント・スペンサー』中央公

論)四一九—四二〇頁
(17) R. Welleck, Concept of Criticism, pp. 37-43.

(文芸科助教授)